

戦後の混乱期を脱し、もはや戦後ではないといわれるようになったのは、昭和30年頃からであっただろうか。家庭用電気製品の売り上げも増加し、白黒テレビ、洗濯機、冷蔵庫を三種の神器ともてはやし、それが流行語になったのもこの頃である。

昭和31年（1956）『婦人生活』5月号（同志社）に、「商売々々座談会いらっしゃいませ靴屋でございます。という、60年前の懐かしい記事が出ているので、ご紹介したい。（写真参照）

出席者は、靴卸の代表・荻津商店の荻津完さん、靴メーカーの代表・東京プラットの浅田進さん、小売店の代表・上野のイイダ靴店の飯田孝一さん、銀座小売店の代表・ワシントン靴店の^{てんぼりあつし}転法輪醇さんの^{そうそう}錚々たるメンバーである。若き日の私も、末席を汚しているが、婦人雑誌に顔の効く美容師のマヤ・片岡先生の推薦で実現した飛び入りの仕事だった。大先輩に囲まれ、冷汗のかきどおしも致し方なかった。

『靴屋さんは綺麗好き、

記者 お店へいらっしゃるお客様の話を伺いしたいのですが、やはり女の方が多

いでしょうね。

転法輪 銀座ではご婦人の方が多いです。

荻津 地域によって違うでしょうが全国平均してご婦人のお客さんが八割なんです。

飯田 売りいいのは男のお客さんですね。

荻津 今はデザインの種類も多いから、選ぶのに時間がかかるんですよ。

稲川 三、四人一緒に入って来られるお客さんは、一番やりにくいですね。買う人がこれでいいといているのに、「あんた、それはおかしいわよ」なんて周りから云われて、自分でもわからなくなっちゃって、「明日、^{あした}改めて又来ます」なんて言って帰っちゃう。（笑声）

転法輪 大体アベックのお客さんは長いですね。半分遊びですから、楽しんでいらっしゃる。靴を選ぶ時、鏡と鏡の間をダンス調で歩いたりするから、売り物の靴が台無しになってしまう。ですから、床は絶えずきれいに掃き、店の前も砂が入って来ないように、両隣りの前まで掃いてしまう。近所の人に「ワシントンさん、いまに区役所から給料が来ますよ」と冷やかされるくらいです。（笑声）』 この項続く。

